

広島大学学術情報リポジトリ  
Hiroshima University Institutional Repository

Title	日本における性差別
Author(s)	姜, 京仙
Citation	日本語・日本文化研修プログラム研修レポート集, 16期 : 85 - 87
Issue Date	2002-03-29
DOI	
Self DOI	
URL	<a href="https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00038892">https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00038892</a>
Right	
Relation	



# 日本における性差別

姜 京 仙

## 【導入】

コンビニで私が成人雑誌を読んでいるのを見て、日本人の友達(女の人も、男の人も)に、女の人がそんなエロ本を立ち読みするのは恥ずかしいことだと言われた。そのコンビニでエロ本を立ち読みしている人はさすが男ばかり... 実際に私も他の立ち読みしている男の人たちも、性という所にとっても関心をもっているというプライベートなことを他人にみられているということは恥ずかしいことかもしれない。だが、女の人だからといって、周りから、変に見られたり、その行為に制限されたりするのは、私にはどうも理解ができなかった。それで私は日本において、男女とはどういうものなのか考えてみた。

## 【本論】

韓国では、日本みたいに性文化が表に出されているのを否定的にみる見方が多い。だから多くの韓国人は性的な関心を心の中に閉じ込めたり、裏で発散したりすることが多い。だが、日本は事情が違う。性文化、とくに低俗な性文化をいろんな形で表に出すのが今の日本である。

風俗やら、漫画やら、エロ雑誌やら、日本は非常に性的に開放度が高い。

それは、本能の動物としての人間からして、本音を素直にだしているという所では、批判するというのはできないことである。でもその多くの低俗な性文化が男の快樂のため、女の性が商品化されているという点では、指摘するところである。

女性である私が、コンビニでエロ雑誌を立ち読みするのを見てビデオレンタル店のエロコーナーでうろうろしているのを見て、女の人が、、、、という目で見られているのが、その証拠である。

日本では、女と男の区別の特徴が、ほかの国よりもはっきりしている。たとえば、色の選択においてもそうである。多くのものには大きく二種類のカラーに分けられている。男性用の色、女性用の色、その色を誰がいつから決めたわけではないだろうけど。

女性が使うものにはだいたいピンクの色が多い。男の人が使うものには大体青やグレーの色が多い。

これは私がルームメートのハンガーリー一人から言われて、初めて気が付いたことである。

ルームメートは、洗濯バサミでも、子供のランドセルでも、多くのものが同じデザインでも二種類の色にわけられているところにとっても興味を持っていた。

日本に留学している、ある外国人の娘が、雨の日、青い傘を持って登校したら、男の学生がみんな、“女の人が男の人の傘を持ってるんだぜ”と笑ったそうだ。その子どもは もちろんそんな経験を自分の国では経験しなかった。ビデオレンの店のエロビデオを集めておいた(日本のエロビデオの規模は驚くべきほど巨大である)コーナーに言ってみると、全体がピンクの色で目がまぶしいほどだ。本屋に言ってみると、青年マンガのコーナーと、少女マンガのコーナーがあって、ふと見たら少女マンガのコーナーはなんだかのピンク色で鮮やか。

ピンクの色が悪い、青がいいということではない。そのピンクという色にたいしての人のイメージに問題がある。

この前、私は日本に留学して、アパートを契約し、家具や色んな生活必需品をそろえていた。その時、私のチューターは私や他の外国人にリサイクルのカーテンをあげようとした。その外国人の中でトロッコ人の男の人がいて、その人がカーテンをもらえないか、っていったら、チューター(日本人の女の人)や他の日本人の人達変な笑いをしながら(ちょっと恥ずかしがりながら)、“ピンク色なんだけど...”っていうのである。

一体ピンクがどうしたという事なのか。

ピンクの色について多くの日本人の人に質問して見た。大概の人がピンクという色に女、いやらしいというイメージを持っていた。

結局、多くの商品にピンクの色をつけて、女の人の用と決め付けて、女の人を性的商品化しているのと、まったく無関とは言えないのだろう。

電車の中で、女の人が、またを開いて座っていると、注意される。男は注意をされない。男はよく下品な俗語で、“女を食べる”と言う。女の人が、“男を食べる”といたら、まるで、言葉の文法が間違っているように聞こえる。女の人には大きな行動を見せてはいけない。やさしく、かわいく、うつくしく、、、

大昔から男は女に‘女らしさ’を強要してきた。‘女らしさ’—外見にしる内面にしる—の欠如に対する女の人自身の不安(結局男によって生じたものなんだけど)は女の人の野心や願望を押し付けるものとして使われてきた。

‘女らしさ’は、時おり賢明な妥協のための保護色として発揮するものの、‘女らしさ’に身をなげ、それに失敗する不安感や劣等感などといったものは、自分自身の大きな業績を達成する可能性を閉じるものなのだ。

つまり、外見であれ、服のスタイルであれ、行動の規範であれ、‘女らしさ’は、女性の性的アイデンティティにとって心理的な制約となる。

今日にいたるまで社会的価値観や文化的理想の形成過程において、男性上位の性風土がまねいた女性達の‘女らしさ’の間違った性的認識が、ジェンダーを決める社会的決定要因となった。

## 【結論】

女の子が親から、赤いランドセルやレースがいっぱいついた服をかってもらって、“カワイー”と言いながら、身につける瞬間、子どもはそれが女と男の違いだと考えてしまう。他の男の子の服の色やデザインなどを見ながら、それが男と女の違いだと思う。

教育によって、社会によって、男も女も固定観念を持たされていくのである。子どものしつけ、学校の教育、社会制度が、男と女をもっとはっきり区別させてしまう。

性役割を身につけて行く間に数え切れない差別が行っている自体も知らないまま、それがあたりまえのように。まるで自然の法則のように思いわせていく。

私もそういう教育の社会のなかで育って来て、あまりこのような問題に気が付いた事が無かった。

コンビニで、立ち読みしているのを、変な目で、見られてから、女と男の性別に付いて考えて見た。

日本は性文化の開放度がとても高いからと言って、女の人々の性的言動にも開放度が高くなったわけではなかった。むしろ、女の人を性的に美化し、男達が作った女のイメージを商品化して女の人に続けて美(男が作った外的な美の基準,または女らしさ)への努力を求めることが非常に多く見られる。その中で、女に嫉妬心、劣等感を持たせる。

私がエロ本に載っている胸が大きい、腰がしまっている、脚が長い、きれいな顔のモデル達を見ながら劣等感を感じたり、ダイエットを工夫したり(健康のことではな、ただの美の感覚だけの)する事も、間違っている社会と教育によって現れる悲しい自己卑下であるかもしれない。

性に関しての男の関心も、また女の関心もそのもの自体は悪くない。だが、それを歪曲して男性上位の性文化を創張している社会に問題があるわけだ。